

=====

CONTENTS

- 巻頭言 「第74回全国学術大会に向けて」
- 第74回全国学術大会のご案内
- 事務報告
 - 2024年度第1回常任理事会議事録
- 地域部会報告
 - 2024年度西日本部会研究集会報告
 - 2024年度関西部会大会報告
- お知らせ
 - 2025年度会費納入のお願い
 - 学部生の入会手続き変更について
 - 2025年度開催第75回全国学術大会の自由論題・企画分科会の公募時期について
- 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

=====

■ 巻頭言

第74回全国学術大会に向けて

福田 円（法政大学）

昨年度の神戸大会に続き、今年度の大会もすべて対面で実施することとなった。そろそろ「脱コロナ」という言葉も聞かれなくなってきたが、報告と議論の場はすべて対面、資料の共有などではできるだけオンライン化という風にメリハリを付け、パンデミック下での学会の経験が無駄にならないように心がけたいと考えている。

また、第72回学術大会の前に倉田徹同大会実行委員長も仰っていたが、実行委員会は最小限の構成とし、できるだけシンプルな大会運営を心がけている。もしかしたら、既に不安や物足りなさを感じておられる会員もおられるかもしれないが、現地では充実した対話と交流の場をつくれるよう日心がけを進めている。

共通論題では、中国と台湾の間で習近平政権が進めている「融合発展」戦略とその影響について議論をすることにした。これは、私自身がこの近年関心を持っている研究テーマであるので、これを機に会員諸氏のお力を借りて、議論を深めてみたいと考えたことが最大の動機である。

ただし、テーマ設定の理由はそれだけではない。「融合発展」という方針は対台湾政策に限らず、中国国内の他の政策領域においても推進されていて、中国の国内情勢と対台湾政策を結節するキーワードのようである。また、「融合発展」が目指される分野は、政治や安全保障よりも、経済、文化、

アイデンティティなどが主であり、この戦略の内実を理解するには学際的なアプローチが必須である。まさに、多分野の中国研究者が集う現代中国学会で議論するに相応しいテーマではないだろうか。

多くの会員からご応募いただき、自由論題やテーマ分科会も充実したプログラムとなった。既に会員用メーリングリストにて、大会の資料を共有する Google ドライブの URL をご連絡差し上げた。現在アップロードされている要旨集に加え、今後は各報告者からのペーパーやレジュメもアップロードされる予定なので、参加する分科会を吟味する際にはそれらをご活用いただきたい。

法政大学市ヶ谷キャンパスの最大の取り柄は首都圏各地からのアクセスが良いことである。また、キャンパス周辺には神楽坂、千鳥ヶ淵などのほか、各種博物館や美術館が点在し、ランチや二次会に適した名店も多々ある。さらに、キャンパス内もコロナ禍中に複数の校舎建て替えが完了し、旧キャンパスをご存知の方は目を見張るような変化を遂げている。近隣の方にも、遠方の方にも、時間に余裕を持ってお越しいただき、ぜひゆっくりとポスト・コロナの大会を楽しんでいただければ幸いである。

■第74回全国学術大会のご案内

会員各位

2024年の日本現代中国学会全国学術大会は、10月19日（土）と20日（日）の両日、法政大学市ヶ谷キャンパス（富士見ゲート）において開催されます（対面のみ）。今年の共通論題のテーマは「習近平の『融合発展』戦略と台湾」です。

□大会プログラム

2024年10月19日（土）共通論題・懇親会

12:30～	受付（法政大学富士見ゲート5階）
13:00～17:30	共通論題：「習近平の『融合発展』戦略と台湾」 （法政大学富士見ゲート5階 G503教室）
18:00～20:00	懇親会（法政大学富士見ゲート3F つどひ）

2024年10月20日（日）自由論題・分科会

9:30～	受付（法政大学富士見ゲート4階）		
場所	会場①：G401教室	会場②：G402教室	会場③：G403教室
午前の部 10:00～ 12:00	自由論題1： 歴史・文化1	自由論題2： 台湾・香港	テーマ分科会1： 商務印書館と中国現代文化の形成
午後の部① 13:00～ 14:30	自由論題3： 政治・経済	自由論題4： ジェンダー	自由論題5： 歴史・文化2
午後の部② 14:45～ 16:45	自由論題6： 文学		テーマ分科会2： 改革開放萌芽期の中国を歴史化する

□共通論題プログラム

共通論題：習近平の「融合発展」戦略と台湾（法政大学富士見ゲート 5 階 G503 教室）

司会・趣旨説明：13:00～13:10 川島真（東京大学）

共通論題趣旨：

2024 年 1 月に台湾で 4 年に一度の総統・立法委員選挙が行われ、民進党の頼清徳候補 が当選しました。民主化後の台湾では初めて、民進党が 3 期目の政権与党を担うこととなります。他方で、民進党は立法委員選挙で議席を減らし、単独過半数を獲得できませんでした。習近平政権はこの選挙結果を、民進党に対する不信任の増加だと総括し、台湾に対しては引き続き「愛国統一力量」を増やすべく働きかける姿勢を見せています。

今後、中国と台湾の間で直ちに軍事紛争が起きる可能性は低いものの、台湾に対する硬軟を織り交ぜた攻勢はさらに強まるものと思われます。そうしたなかで注目を集めているのが、習近平がそのキャリアの多くを過ごした福建省と、そこに近接する金門・馬祖 を突破口として、台湾との統合を進めようとする「融合発展」戦略です。

本年の全国大会共通論題では、この「融合発展」戦略に注目し、その実態や可能性、台湾と地域の国際関係に与える影響などについて、学問的に議論をしたいと考えています。

第1部 報告次第：

13:10～13:40 鈴木隆（大東文化大学）「福建省時代の習近平の台湾認識と政策実践」

13:40～14:10 下野寿子（北九州市立大学）「福建省と『融合発展』—中央地方関係の文脈からの考察」

14:10～14:40 松本充豊（京都女子大学）「『融合発展』戦略とエコノミック・ステイトクラフト」

14:40～15:10 福田円（法政大学）「『融合発展』戦略と金門島」

※報告題目はいずれも仮題

15:10～15:30 休憩

第2部 討論コメント：

15:30～15:45 黄英哲（愛知大学）

15:45～16:00 川島真（東京大学）

16:00～17:30 全体ディスカッション

18:00～19:30 懇親会（法政大学富士見ゲート 3F つどひ）

□自由論題プログラム

開催時間：午前の部10:00-12:00、午後の部①13:00-14:30、午後の部②14:45-16:45

場所：法政大学富士見ゲート 4 階

午前の部：10:00-12:00

自由論題 1：歴史・文化 1

座長：木村 自（立教大学）

報告者：

肖 童（鹿児島大学・院）

「近代日本人の長江中流域認識の変遷－憧れと現実のはざまで－」

楊 小平（中国・四川省社会科学院）

「20世紀初期における中国神話学の発生と日本」

自由論題2：台湾・香港

座長：大東 和重（関西学院大学）

報告者：

任 鵬飛（東京外国語大学・院）

「日本植民地時代における台湾の自治思想の発展」

張 宇博（早稲田大学）

「香港と台湾をつなぐもの－近年の香港映画に描かれる「台湾」を中心に香港映画に描かれる「台湾」－」

小栗 宏太（東京外国語大学）

「日本における香港ポピュラー文化受容－1990年代アジアン・ポップ・ブーム期の刊行物を中心に－」

テーマ分科会1：「商務印書館と中国現代文化の形成－清末民初・五四時期を中心に－」

企画者・司会：瀬戸 宏（摂南大学・名誉）

報告者：

瀬戸 宏

「商務印書館研究の意義」

張 稷（中国・商務印書館、南京大学）

「商務印書館が中国現代文化形成に果たした役割」

討論者：瀬戸 宏

午後の部①：13:00-14:30

自由論題3：政治・経済

座長：巖 善平（同志社大学）

報告者：

伊藤 亜聖（東京大学）、林 載桓（青山学院大学）

「データとしての習近平重要講話」

相川 泰（公立鳥取環境大学）

「中国環境問題の近況（2024年版）」

自由論題4：ジェンダー

座長：松本 ますみ（室蘭工業大学・名誉）

報告者：

余 楽（お茶の水女子大学・院）

「農民工の子ども世代の県城移住に見る家族関係の変化－湖北省X県県城における住宅購入ブームを事例に－」

王 雅俊（早稲田大学・院）

「婚活アカウントから見る中国サブカルチャー愛好者のアイデンティティの変化－アカウント『拯救大齡二次元』を中心に－」

自由論題 5：歴史・文化 2

座長：李 曉東（島根県立大学）

吉川 次郎（中京大学）

「清沢冽の中国認識－ジャーナリストとして観た1920年代の中国－」

李 昱（愛知大学・院）

「満洲建国大学「研究院」研究動向－『研究院月報』を中心に－」

午後の部② 14:45-16:45

自由論題 6：文学

座長：上原 かおり（フェリス女学院大学）

報告者：

陳 昊旻（愛知大学・院）

「中国文学作品における妖怪概念の変容」

楊 文溢（京都大学・院）

「沈從文「水雲」における「過去」の描き方とそのリアリティ欠如の意味について」

楊 靈琳（立命館大学）

「劉慈欣のSF作品における未来「中国」の「国家」－『老神介護』『扶養人類』を中心に－」

テーマ分科会 2：「改革開放萌芽期の中国を歴史化する」

企画者・司会：中村 元哉（東京大学）

報告者：

河合 玲佳

「『改革・開放』と胡耀邦」

新田 順一（慶應義塾大学・院）

「改革開放初期の諮問集団の役割」

横山 雄大（東京大学・院）

「政治・経済改革の教訓としてのハンガリー・ポーランド－国際政治学者・王逸舟の視点から－」

討論者（コメント）：

李 昊（東京大学）

加茂 具樹（慶應義塾大学）

網谷 龍介（津田塾大学）

■書籍販売 両日ともG501教室にて、中国関係書店による書籍の出張販売を予定しています。是非ご利用ください。

■大会実行委員会からのご案内

1. 今大会は事前の出欠登録を必要としないので、会場に直接お越しください。受付で名札をご作成いただきますので、名刺がある方はお持ちください。
2. 報告要旨集、報告論文、資料などは大会のGoogleドライブに格納し、各自ダウンロードしていただきます。ドライブのURLは会員MLにてご案内いたします。また、会場ではeduroamのほか、当日用wi-fiアカウントをご利用いただけますが、端末の貸し出しはございません。開催校からの紙媒体での資料配布もございません。
3. キャンパスへの車両入構はできません。徒歩または公共交通機関をご利用ください。
4. 宿泊施設はご自身で早めにご予約ください。
5. 法政大学構内は、決められた喫煙所以外は禁煙となっています。
6. 託児サービス利用補助の申し込みは 1 週間前までに熊倉までご連絡ください。今回は、開催校がサービスをご紹介することはできませんので、ご自身でご利用いただいたサービスに対して、補助金をお支払いする形となります。

法政大学 熊倉 潤

【E-mail】 kumakura[アットマーク]hosei.ac.jp

日本現代中国学会第 74 回全国学術大会実行委員会

【E-mail】 genchu2024[アットマーク]gmail.com

■事務報告

□2024 年度第 1 回常任理事会議事録

日時：2024 年 7 月 7 日（日）9:30-11:30

場所：zoom によるオンライン開催

参加：菅原慶乃理事長、中村元哉副理事長、何彦旻事務局長、楊秋麗会計担当理事、石塚迅関東部会代表、西村正男関西部会代表、加治宏基東海部会代表、高橋俊編集委員長、川尻文彦広報委員長

欠席：小笠原淳西日本部会代表、家永真幸年度変更担当理事、加茂具樹規約・財政健全化委員、阿古智子規約・財政健全化委員

*オブザーバー：福田円 2024 年度法政大学大会実行委員長、吉川次郎 2025 年度愛知大学大会実行委員長、大澤肇ホームページ担当広報委員、花尻奈緒子 NL 担当広報委員

【報告事項】※敬称略

1. 会務（事務局）

会員動向（2024 年 6 月末現在）：

総数 654 名（うち、団体会員 4 名）（新規入会者 12 名・新規入会入金待ち 4 名、退会者 2 名）

／会費長期未納会員 33 名／住所不明会員 14 名

2. 会計（楊）

- ① 2024 年 6 月末時点の会費納入率に関する報告があった。4 年会費未納者は計 33 名、住所不明者は 14 名となっており、各地方部会代表に会費納付の催促や情報提供が求められた。
- ② 2024 年度予算と 2024 年度単年度経常収支（概算）についての報告があった。単年度は赤字になる可能性があり、会費納入率を向上させる工夫を継続的に検討する。

3. 編集委員会（高橋）

『現代中国』第 98 号の編集作業は順調に進んでいることが報告された。2025 年より全国学術大会の開催が 5 月に移行することに伴って、『現代中国』の発行時期については理事長・事務局長と編集委員会との協議したことが報告された。

4. 広報委員会（川尻）

- ① ニュースレター第 72 号を 2024 年 6 月付けで発行したこと、次号 73 号は全国大会直前号となり、9 月末発行（予定）を目指して、順次原稿を依頼する予定であることが報告された。
- ② HP の掲載内容は順調に随時更新していること、リニューアル案は継続的に検討していることが報告された。

5. 地域部会（石塚、西村、加治、小笠原（代読））

関東部会、関西部会、東海部会、西日本部会の各代表から活動報告があった。次年度以降、全国学術大会の開催時期の移行に伴って、関西部会大会の秋開催が検討中である報告があった。詳細は学会 HP およびニュースレターを参照のこと。

6. HP リニューアル（菅原）

学会 HP リニューアル計画について、家永前事務局長より依頼した見積書の内容を事務局長、広報委員長、HP 担当とともに精査し、業者に内容確認をしていることが報告された。現行の HP 関連の契約プランや代金などの条件をこれから明らかにしてから、リニューアルの準備を進めていく予定である。

7. 渉外関係（何）

日本学術会議協力学術研究団体規定に基づき、本学会の代表者、連絡担当者の変更手続きを行った。原書房刊『全国各種団体名鑑 2024』の本学会に関するデータの情報更新を行った。

8. その他

- ・事務局より J-STAGE への論文登録を引き続き行うことについて説明があった。
- ・楊理事より託児所補助費の今後の活用しやすいように工夫してほしいとの説明があった。

【審議事項】

1. 2024 年度全国学術大会

- ・資料に基づき、福田実行委員長より、3月の常任理事会以降の開催校における大会の準備状況および共通論題のプログラムと進捗について説明があった。石塚関東部会代表より自由論題のプログラムに関する説明があった。審議の結果、原案通り承認された。
- ・自由論題 14 件、テーマ分科会 2 件の応募があり、追加募集はしないことを確認した。
- ・開催方式（1 日目の共通論題の一般公開）、要旨・レジュメなどアップロードする特設サイトの設置、開催当日のアレンジ、事前申込方法について意見交換がなされ、承認された。
- ・大会のプログラムについて、自由論題に登壇しない共著者の氏名の記載、非会員を討論者としての招聘に関して意見交換がなされた。中国研究以外の研究者を招聘して異分野の声を聞くことも必要で、学会の活性化にもつながることを常任理事会として意見が一致した。

2. 2025 年度全国学術大会

- ・資料に基づき、加治東海部会代表より 2025 年愛知大学で開催される学術大会の開催日程（2025 年 5 月 31 日と 6 月 1 日）および会場の準備状況について説明があった。吉川大会実行委員長より共通論題のテーマ案に関する説明があった。審議の結果、原案通り承認された。
- ・共通論題のテーマの妥当性と精緻化、登壇者の人選と推薦、海外からの講演者の招聘とそれに伴う場合の経費負担などについて意見交換がなされた。中村副理事長からは大会関連の経費については原則東海部会の部会費と全国大会運営費をもって賄う必要があることを補足説明した。
- ・共通論題報告を『現代中国』へ寄稿いただくための原稿締切日（2026 年 5 月末日）を確認した。
- ・2025 年度の学術大会は 5 月開催であるため、12 月までに 2024 年度大会開催校との引き継ぎを行うことを確認した。

3. 『現代中国』の発行時期について（継続審議）

- ・資料に基づき、高橋編集委員長より、全国学術大会の開催時期の移行に伴い、次年度以降の『現代中国』の発行時期について、理事長、事務局長、澤田前編集委員長と協議し、編集作業依頼の都合で時期の年度末への移行が不可能であることから、現行通り 9 月末発行とし、全国学術大会の共通論題の原稿は翌年発行の『現代中国』に掲載する原案について説明があった。また、2025 年度大会と 2026 年度大会の共通論題を特集として、2026 年 9 月末発行の合併号（100 号）に載せ、それ以降各年全国学術大会の共通論題は当年度 9 月末発行の『現代中国』に掲載する可能性についても補足した。菅原理事長より合併号の発行に関する予算措置、編集人員の見通しについて補足説明があった。

4. 会務

加治東海部会代表より、部会で承認済みの新規入会（1 件）について補足説明があり、常任理事会で入会を承認した。事務局より、今後学部生が入会する場合、入会申込書とともに、所属大学の指導教員に理由書（書式自由）を書いていただき、事務局に提出することが提案され、

承認された。

5. 次回常任理事会日程と開催方法

- ・2025年度大会の共通論題の審議をすべく、全国大会開催後の10月末か11月上旬に臨時常任理事会をオンライン開催予定。後日メールで日程調整を行う。
- ・2024年度第2回常任理事会の開催日程は執行部で取り決めて、秋の臨時常任理事会のときに審議をする。

6. その他

今期2年間における学会の財政構造の健全化について、すぐに何かの予算を削ることではなく、現時点で使える予算を有効活用すべく、地方部会費は地方の活動のみならず、学会全体の活性化につながるような集会やイベントなどに是非活用していただきたい旨、菅原理事長から呼びかけがあった。

以上。

■地域部会報告

□2024年度西日本部会研究集会

2024年6月8日(土)、西日本部会は熊本学園大学大江キャンパス新1号館にて定例の部会研究集会を開催した。今回の研究集会では福岡の会員を中心とした計5本の報告が行われ、福岡、熊本のみならず鹿児島や広島などの遠方からも参加者があり、部会をまたいだ学会会員の交流を深める貴重な機会となった。以下、各報告のテーマならびに概要、質疑応答の内容を簡単に紹介したい。

第一報告：唐寅霖会員(西南学院大学・院)「清末民初の婚姻制度と婚姻観の変容—中国湖南省の女性を中心に」では、近代中国における女性運動や自由婚姻の実施に湖南省の女性が大きく関わっていたことに注目し、婚姻制度の変容を当時の女性の視点から論じた。質疑応答では、先行研究の蓄積が踏まえられていないのではないかという指摘がなされた。また、清末民初における女性の婚姻観の変遷に対する考察が一般論的であり、より湖南女性の役割に焦点化した研究の必要が指摘され、今後の課題に対する建設的な意見が提示された。

第二報告：蔡遠杭会員(西南学院大学・院)「広東省における民間信仰の祭祀圏と村落共同体の形成—饒平県大埕鎮の三山国王信仰を中心に」では、改革開放以来変貌を続ける中国農村における民間信仰の役割や祭祀圏の現在について、潮汕地域・饒平県大埕鎮での三山国王信仰に関する現地調査を通して論じ、大埕鎮の村落共同体や村民の集団意識が今日も三山国王信仰を強固な媒介として形成されていることを明らかにしようとした。フロアからは、大埕鎮における三山国王信仰の成立時期やフィールドワークの方法についての質問が出され、意見が交わされた。

第三報告：李斯琪会員の報告(西南学院大学・院)「張恨水小説の変遷について—『啼笑因縁』と『落霞孤鶩』を中心に」では、民国期の人気作家張恨水のベストセラー小説『啼笑因縁』に対する文壇の評価を基に、次いで書かれた『落霞孤鶩』をテキスト分析することで、作家本人

が『落霞孤鶩』を高く自己評価した理由を挙げて、作家の意識の変遷と内容の両面から詳しく論じた。『落霞孤鶩』が社会を写実的かつ批判的に描こうと試みた、社会的・倫理的意義が強化された作品だという本報告の主旨に賛同する声がフロアからあがり、活発な意見交換が行われた。

第四報告：大澤武司（福岡大学）「毛沢東と国民党戦犯―「寛大」処理の思想と現実のはざま」では、中国共産党による国民党戦犯処理を、中国の対台湾政策の展開及び中国の対台湾和平統一工作を考察するうえでも重要な意義をもつ問題として位置付けたうえで、1959年9月の国民党戦犯特赦に至る政策決定の過程について解明しようとする試みが論じられた。フロアからは、中国による国民党戦犯処理における周恩来の役割や国民党戦犯のなかに特務関係者が含まれていたのかなどの質問が出された。報告者からは国民党戦犯処理も日本人戦犯処理と同様に最終的な判断はあくまで毛沢東が行っており、周恩来はその執行担当であったことなどが説明され、今後の研究の方向性が示された。

第五報告：梅村卓（西南学院大学）「抗日戦勝記念日の改定と東北地域」では、1951年の抗戦勝利記念日の変更過程について変更の主因を挙げて分析するとともに、8月15日では不相当とされた背景について論じ、そのうえで旅大における抗戦勝利記念日の実態やソ連軍との関わりについて明らかにしようとした。フロアからは記念日の改定に高岡が関与していた可能性について質問が出され、報告者は直接の史料は存在しないが高岡がソ連軍人と良好な関係を築くよう東北各地に指示し、毛沢東がこれに見習うよう全国へ指示した史料は存在すると応答し、さらにソ連側の史料の有無やロシア人の回想録にあたる必要性などについても建設的な意見交換がなされた。（記：小笠原淳会員）

□2024年度関西西部会大会報告

2024年6月22日（土）京都大学吉田南キャンパスにおいて、2024年度関西西部会大会が開催された。午前は、「経済」、「社会」、「文化」の3分科会にて合計8つの報告が行われた。また午後には実施された共通論題「中国農村社会の変貌―農業、農村・農民文学、農村ガバナンスの視点から―」では、3つの基調報告と総括コメントがなされ、活発な議論が交わされた。総じて本大会では68名の参加があり、懇親会もコロナ禍を挟んで数年ぶりに催され、和やかな雰囲気での交流の場が醸成された。それぞれの報告の概要は以下の通りである。

〈経済分科会〉

第一報告は報告者の希望によりニューズレターからは割愛します。

第二報告は韓金江会員（岐阜協立大学）の「機械産業の生産財分野から見る中国工業化の特徴」であった。これは、中国の機械産業が外国からの技術導入を積極的に行い、キャッチアップ戦略を実行することで工作機械では生産額で世界の第1位、建設機械では市場として第1位で売り上げも急拡大、農業機械でも大きくシェアを高める一方で、高級機が依然として日本や欧米企業によって占められている中で、積極的に国際M&Aを実施し、「国際化型工業化」に乗り出していることを明らかにするものであった。「国際化型工業化」は改革開放前の「閉鎖的自己完結型」から、改革開放後の合弁や技術提携等によって技術を導入する「開放的自己完結型」

からさらに自らが海外に乗り出していく新たな段階を示すものであるとされている。機械産業による対外 M&A の豊富な事例分析がなされ、中国の技術導入の在り方の変化を印象付けるものであった。

討論としては、主に、獲得された技術のタイプや技術導入後の成果が問われた。M&A は手段であり、獲得された技術の中身を明らかにするものでなく、獲得技術の中身の分析が必要とされた。また、自社開発で進められているオンライン制御技術などとの関連も問われた。また、工作機械産業は山田盛太郎『日本資本主義分析』の分析に見られるように、単に一産業というだけでなく、一国経済の自律的な発展をもたらす基幹産業であり、マクロ的なインパクトの分析が必要であるとの意見も出された。(記：中川涼司会員)

〈社会分科会〉

第一報告は、張曼青(京都大学)「中国における肥料農法の転換および農民の主体性」であった。本報告は、新中国建国後の激動する社会転換の荒波を生き抜く中国農民の主体性に着目し、これまで独特の方言や生業を通じた固有の語りの壁に隠されていた彼らの内なる真の世界観に接近しつつ、その豊かな経験知が凝集されている施肥行為への深層的意味解釈から、既存研究では固定化されて論じられてきた受動的な農民像を刷新し、「農」を通じた主体性を明らかにしようとする野心的な試みであった。具体的には、1980年代以前に各地域において土着の材料と簡易な方法にて製造された「土化肥」に焦点を当てながら、『人民日報』・当地史料の分析並びに長期のフィールドワークを糧に、中国農民の主体性は、その歴史的な根源を持つこと、また新中国建国後に生じた農業集団化から市場経済への転換という劇的な社会転換の中で、肥料農法がいかに独自の漸進的転換を辿ってきたのかをあぶり出すことに成功している。コメンテーターからは、まず評価できる側面として、7つの角度から詳細に解説がなされた。さらに、より充実した論考に高めるための示唆として、「調査対象の代表性と一般化の課題」、「手法としての歴史的記憶の正確性」、「二項対立的に扱うのではなく、本論で捉えようとする主体性の具体化」、「農学的な研究成果と照合する必要性」、「80年代以降に複層化してくる他の要件の影響について」などの諸点が具体化された。

第二報告は、朝木日力格(大阪大学・院)「中国内モンゴル自治区の放牧制限下における畜舎牧業一定住化にて生活するモンゴル人がなぜ牧畜から離れないのか」であった。中国内モンゴル自治区は、歴史的にモンゴル人が牧畜を営む地域として知られているものの、激しい蒙地開墾と急激な農地化により、自然環境に負荷がかかり、さらには1980年代前半の生産責任制の導入や1990年代以降の家畜の多頭化・畜産の市場経済化の進展により、「過放牧」の深刻化に転じている。ただし、遊牧を営むために西部地域へ移動したモンゴル人に比し、とりわけ東部地域では土地資源を生存に活かす「半農半牧畜業」が最大の特徴をなしている。本報告では、東部地域において、生存戦略により移民の入植を受け入れながらも自然環境や制度変容に応答しつつ巧みに形成されてきた生業変遷のプロセスを彼らの人生史から掘り下げようとする試みであり、今回は、着手し始めた調査の進捗報告がなされた。コメンテーターからは、研究視座は興味深いものの、まだ十分な調査結果が得られていない課題を指摘しつつ、幾つかの視角から今後に向けての有益な助言がなされた。概して、新中国建国後の歴史を中心に議論を行うのであれば、農政や経済、環境等のマクロな政策や制度を包摂した分析が必要になること、ま

た従来のフレームワークとは異なる新しい分析フレームワークの設計についての具体的な示唆が加えられた。

第三報告は、王石諾（大阪大学・院）「単位制社会」の弱体化に伴う移動経験から見えてくる日中「二つの東北」の痛み—結婚移民となった中国人女性のライフストーリーを手掛かりに—であった。本報告では、旧満州の歴史的記憶を引き継ぐ中国東北において、80年代以降の「単位制社会」の弱体化に伴って結婚移民となり日本の東北地方に移動してきた中国人女性に目を向け、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生き抜く女性の「歴史実践」についてライフストーリーより迫る論考であった。戦争の歴史における「植民支配—被支配」の両端に置かれる「二つの東北」は、それぞれ異なる近代化の経路を歩みつつも、類似する巨大な進歩叙述が牽引する下で、「中央」と対峙する「周辺」の立場に共に追い込まれていった。こうした中で、結婚移民である女性たちが互いの痛みに共感しつつ生きるその営みこそが、国境によって閉ざされることのない、二つの東北の「結び目」となる可能性を示唆した。コメンテーターからは、中国残留邦人やその2世、3世の課題についても留意すべき時間の流れの中で、本研究の斬新な視点や新しい解釈の手法にある種の期待が寄せられた。その上で、日中「二つの東北」に拘る意図をもう少し掘り下げる必要性について、また「人の移動から見る日本の「東北」」の三段階の説明は、最後以外は東北に限ったことではなく、逆に東北地域以外でも同様な現象が起こっていないかを確認する必要があるのではないかとの指摘がなされた。

以上、今回の「社会分科会」では、現代中国を巡る共通の学術的・社会的関心事に対して、多様な専門分野の研究者が一堂に会し、ディシプリンを超えた建設的で有意義な議論が展開されたことは、特筆すべきことである。（記：三好恵真子会員）

〈文化分科会〉

第一報告は辻直美（同志社大学・院）「文物保護者としての周恩来「神話」を問い直す」であった。本報告は周恩来が文物保護において大きな功績を残したという伝説にメスを入れる意欲的な発表であった。コメンテーターからは「文物」という言葉の日中間の意味の違い、文物破壊は1990年代以降の経済開発によるもののほうが大きいなどの指摘があった。

第二報告は管新寧（大阪公立大学・院）「博覧会の視覚的表現から見る満洲映画『皆大歡喜』」である。映画中における大東亜建設博覧会の映像分析を中心とする内容であった。コメンテーターからは、啓民映画と娯民映画の違いを念頭に置くべきではないかなどの指摘があった。

第三報告は宋元祺（関西学院大学・院）「軍中作家としての朱西甯 1949年の渡台から72年の退役まで」1949-1972であった。台湾の外省人作家である朱西甯の軍人履歴や眷村生活、そしてやがて反共と距離を置くようになるまでの文学活動を概観する内容であった。コメンテーターからは、USIS（アメリカ合衆国広報文化交流局）と台湾文学との関係についても念頭に置くべきではないかなどの指摘があった。記：西村正男会員）

〈共通論題〉

「中国農村社会の変貌—農業、農村・農民文学、農村ガバナンスの視点から—」と題して、転機を迎えた中国農村の変貌について、農業経済、環境政策、現代文学を専門とする3名の報告と、農村社会、文化評論を専門とする2名の総括コメント、そして総合討論が行われた。

第一報告は、巖善平（同志社大学）「中国における農業・農村・農民の現状と展望」である。20年連続して農業・農民・農村を扱った「中央一号文献」の読み解きを通して、三農問題に対する政策的取り組みの変遷を整理、評価した。続いて統計データを用いて、農業問題に関して、食糧の増産、産地の移動、経営構造の変化、食糧安保を論じた。農村問題として、戸籍制度の改革と新型都市化への転換、農村の空洞化に注目した。最後に農民問題として、貧困の絶対的な緩和と相対的な継続、政治的権利の脆弱さを指摘した。

第二報告は、櫻井次郎（龍谷大学）「訴訟から見えてくる中国農村の環境問題」である。環境汚染の被害が発生している2つの農村について、紛争と訴訟について検討し、少額の補償を得たものの、被害が解消されない「見舞金の罠」に至るプロセスについて報告した。事例地は、広東省韶關市の大宝山鉍山と福建省屏南県にある化学工場である。前者は廃水が重金属を含む強い酸性を帯び汚染源となっており、後者は福州市から誘致移転されたもので、排水、排ガス、廃棄物で周辺地域を汚染していた。

第三報告は、加藤三由紀（和光大学）「中国『新郷土文学』と農村・農民への視線の変貌」である。趙樹理の故郷訪問の経験から農村の大きな変化を概観した上で、半世紀にわたる農村を描く小説の変遷を概観する。改革開放期の近代化が進む郷土中国をリアルに描く「新郷土文学」（王堯）を紹介し、路遙『平凡的世界』（1986-89）と喬葉『宝水』（2022）という2つの茅盾文学賞受賞作を取り上げて考察した。流動化する農村と都市の交錯を背景に、異郷でなくなる農村、他者でなくなる農民に向けられる視線に注目した。

コメンテーター2名からは次のコメントがあった。田原史起（東京大学）氏からは、県域社会を補助線とするコメントが行われた。巖報告をめぐっては、市民と農民の境界が不明確になる中で、農民工の回帰の趨勢や農業の担い手問題、さらに農民工の市民化の場所性が問われた。また櫻井報告に対しては、環境の問題化における農民の認識と外部者の役割、紹介された事例の県における位置性が問われた。宇野木洋（立命館大学）会員からは、加藤報告について、近代化のもつ両義性をめぐってコメントが行われ、参照系として王堯を取り上げた意図、作家に向けられた領導たちの文芸講話の類似性などが問われた。

総合討論ではコメンテーターと参加者からの質問について、報告者から回答が行われ、最後に、農村を県域社会・県域から見通すことについて、各報告者から、権力とのアクセス、歴史的な連続性、農村と都市の結節点としての役割などが提起された。（記：小島泰雄会員）

■お知らせ

□2025年度年会費納入のお願い

学会規約第6条に照らして、2025年度会費の納入をお願いします。

2024年10月に『現代中国』第98号と同封にて、学会事務局より振込用紙を郵送しておりますので、ご利用ください。

年会費は個人会員5000円、団体会員6000円です。過年度未納の会員は、過年度分も納入していただくこととなりますが、よろしく願いいたします。3年を超えて会費を滞納したものは、特別の事情がないかぎり、理事会において退会したものとみなされますので、ご注意ください。

なお、住所・メールアドレス等に変更がございましたら、お手数ですがメール等にて学会事

務局（メールアドレス：tkoni07tk@outlook.jp）までお知らせ願います。

※事務局のマンパワーの関係にて、当該年度はじめではなく、学会誌に同封させていただきました。ご理解ご協力のほどよろしく願います。

振込用紙をご使用にならない場合は、以下の口座にお振り込みをお願いします。

【銀行名：ゆうちょ銀行 口座種類：一般振替口座

口座番号：00190-6-155984 口座名義：日本現代中国学会】

□学部生の入会手続き変更について

今後、学部生が入会する際には、以下の手続きをお願いいたします。所属大学の指導教員に理由書（書式自由）を作成していただき、入会申込書とともに事務局宛に添付ファイルとしてお送りください。

何卒、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

□2025 年度開催第 75 回全国学術大会の自由論題・企画分科会の公募時期について

すでにお知らせしていますように、2025 年度開催の第 75 回全国学術大会（於愛知大学）より大会開催時期が毎年 5 月へと変更されます。これにともない、自由論題・企画分科会の公募時期も従来のスケジュールから変更されます。第 75 回大会の自由論題・企画分科会は 2024 年秋に公募を開始する予定です。公募の詳細については学会事務局からの電子メール、及び学会ホームページにてお知らせします。

■日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

吉田豊子著『中国民族政策の歴史的研究—内モンゴルと国共両党 1945～1949』研文出版

小栗宏太著『香港残響—危機の時代のポピュラー文化』東京外国語大学出版会

山下大喜著『中国近代における「国語科」の創成—胡適の思想的模索』九州大学出版会

=====

日本現代中国学会事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚 6-22-18

一般社団法人 中国研究所内 日本現代中国学会事務局

TEL 03-3947-8029 FAX 03-3947-8039

EMAIL c-genchu[アットマーク]tcn-catv.ne.jp

郵便振替：東京00190-6-155984

広報委員長：川尻文彦（愛知県立大学）

ニューズレター編集：花尻奈緒子（三重大学）

日本現代中国学会HP：<http://www.genchugakkai.com>

=====